まい　あーと・指人形 by 人形劇「サンボ」

写真に聴く立川の鼓動／開催決定

『ベスト立川人・展'85』

Best Tachikawaiian of the year 1985

12月12日～18日／立川駅ビル「ウィル」9階■朝日ギャラリー

「ひょうきん」なルックスが良い。

ダイハツ・ミゼット
昭和38年（1963）
横江一夫さん

地元多摩産れの伯爵夫人には、伊太利亜の血が脈々と流れている。

日野コンテッサ
昭和40年（1965）
藤林理一郎さん

暖かみのあるシャープなライン。

凛とした後姿！

娘さんの誕生と同時期に購入した。この車も同型車は少なくなった。

ダットサン・ブルーバード
昭和40年（1965）
笠井信夫さん

どことなく漂う気品は、20年経た今も変る事がない。真のハイグレードだ。

ニッサン・セドリック
昭和40年（1965）
小泉辰雄さん

この車なくして日本のスポーツカーは語れないという。

トヨタ800
昭和42年（1967）
福岡英樹さん

小さいながら、しっかりスポーツ。

トヨタ2000GT
昭和44年（1969）
井滝和正さん

グラマラスでありながら贅肉のないボディー美のサラブレッドだ。

このラインの美しさ！

EKUTEBIAN VINTAGE-CAR GARAGE

時の流れの宝物

●えくてびあんレポート

ただ古いだけの車（カー）をポンコツという。時の流れとともに、確固たる存在の光を放つヴィンテージ。極上のワインにも似て、なにものにも替えがたい味わい。立川の風に洗われて蘇る車（カー）たちの表情は熟年の貴方（あなた）に、そっくり、そっくり。

メルセデス・ベンツ
1937年（ドイツ）
倉持嘉治さん

一説によるとヒトラーからのプレゼントだという噂も。

モダンマシンにはない頑健な容姿。

英国伝統の由緒正しきインパネだ。

MG－TD
1948年（イギリス）
井滝和正さん

これぞ大英帝国が産んだリアルスポーツカー。

雨が降っても幌を上げないのが英国紳士とか。

シヴォレー210
1957年（アメリカ）
高水武人さん

現代の大海を行く鯨はナウいカラーリングの身体だ。

シンプルな内に本当の贅沢がある。

泳ぎ去る鯨の後姿を見よ！

新車で入手可能な唯一のヴィンテージカー。

シトロエン2CV
1983年（フランス）
原島明男さん

フォード・フェアレーン
1957年（アメリカ）
宮崎将浩さん

これが憧れの自動変速装置

ダッジ・コロネット
1958年（アメリカ）
宮崎将浩さん

遥々ステイツからやって来たメリケン娘には良き時代のアメリカの薫りが漂い、フリーウェイの風になる。

古典的美貌ですね。

何と派手なテールフィン！

ベスト立川人展'85

Best Tachikawajin of the year 1985

12月12日(木)
午後2時に開展
於・朝日ギャラリー(ウイル9F)

写真／天野武男、吉田義治、小林洋治、加藤正嘉、武田和紀
アートディレクター／小塚秀忠
トータルマネージャー／後藤文子

後援／立川商工会議所・立川青年会議所
立川市文化連盟・立川市社会福祉協議会
協和銀行・埼玉銀行・第一勧業銀行・太陽神戸銀行・多摩中央信用金庫
東京都民銀行・富士銀行・三菱銀行・山梨中央銀行

創刊以来「立川と語ろう、立川に生きよう」を提唱しつづけている『月刊えくてびあん』が、総力を結集して取材、いよいよ『ベスト立川人展'85』の開展も間近い。

わたくしたちはこの地「立川市」に住み、あるいは仕事を得て活動をさせて頂きながら、案外と「立川」を知らない、「立川の人」を知らない。取材中わたくしたちは、いく度か耳にしてきたことだろうか。曰く「立川には人材がいない」、曰く「立川には文化がない」と。

そんなことはない！――これが取材記者の結論である。わたくしたちは自信をもってこの展示会を「写真にみる立川の鼓動」と命名した。

真為のほどは読者諸氏の慧眼にまつほかはない。是非のご観覧を乞うゆえんである。

多摩川を愛して18年はさすがに"クリーン多摩川"主宰・三田さん。

たとえば今、私たちの前に多摩川を愛しつづけてきた三田鶴吉さんがいる。単に川を愛するにとどまらない、立川という地こそ自分を生かしてくれるところと決めて売名行為を極端にきらい、ひたすら立川の"緑の下"として、いまや三田鶴吉さんを語らずして、立川は語れないまでに、その存在価値は大きくなった。

が、一方にまた"無冠のヒロイン"が砂川にいる。西尾慶子さんもその一人。女子のパワーリフティングでこの秋、日本新記録を樹立した。主婦であり、勤めをもち、その間にジム通い。はじめてからわずかに一年半でこの記録。西尾さんは48キロという小柄な方。140キロ以上のバーベルを軽々と持ちあげる怪力はどこから出てくるのか。指導の関二三男氏も「天才だ！」と舌をまくほど。

立川高校OBに"日本けん玉道"六段というユニークな活動をする山本康治クンがいる。同じ立川高校二年生の小林弘子さんはクラブ活動でバレー部にいるがまだ補欠だとか。しかし、校門を一歩でると日本的なカヌー選手なのだ。立高の伝統ある幅の広さを物語っているといえようか。

今月の「街角の瞳」に登場の森淑子さんはご覧のように技術を越え、彼女の"人生観"そのものがデザインに表現されている。彼女もまた写真展の主役である。森さんもファンのひとりだという児玉勝己さんは、ハンドベルの世界的指揮者。最近は指揮者の指導に欧米をとびまわっており、立川ではその妙なる音色が聴けなかったが、写真展会期中の12月14日に、はじめて立川市民会館（小ホール）でコンサートを開く。

三人兄弟の森クンはパパの熱心さも手伝って立川を代表する選手に。

子供の世界では落成なった新国技館で全国の"ちびっ子大相撲"がおこなわれ、団体で二位という大成果。ここでも活躍した"森クン三兄弟"は、立川でユニークな存在だ。

まだまだ、掲げればキリがないが、「立川人」が二十数名、それに立川を訪れたゲスト（田淵幸一さん、石坂浩二さん、酒井和歌子さんら）おなじみのポートレートも含めてケンランの写真展『ベスト立川人展』がはじめて催されようとしている。

表紙は語る

幸町の公民館を中心に稽古もつみ、公演も重ねてきている人形劇サークル「サンポ」。堀史子さんを責任者として花房澄恵さん、高野文子さん、妻鳥純子さん、田辺光子さん、石渡和子さん。和気あいあいの中にプロのまねをするのではなく素人の手作りのよさを出してゆこうという心意気がみなぎる。

「子供たちにとって"お母さんの声"というのが大事なので、普段の声で演じるようにしています。一番の喜び？もちろん、会場の子供たちの歓声です」。

増渕登世先生の指導をあおいでいる。連絡36-5183（堀さん）へ。

最終回　立川の花 7　すみれ

山内美郷

「すみれ……」と、口の中でつぶやくたびに思い出す顔があります。色が黒くてシワ深い、額の広い婦人の顔です。

K先生。私の小学校一、二年の担任の先生です。幼稚園に行かなかった私にとって、K先生は師と仰いだ最初の人です。先生はいかり肩で鳩胸で、いつも反り返るほど姿勢がよくて、歩きかたも、ちょっとした表情にも活気がみなぎっていました。よく通る大きな声でハキハキ話し、全身を惜しまず使って黒板に字を書き絵を描き授業を進めました。体の弱かった私は浮かない顔で登校することが多かったのですが、先生の溌剌とした顔を見て、張りのある声を聞くと、気持がしゃんとしました。

楽しみだったのは先生のしてくれるお話でした。先生は話の名人で、大人になった今でも先生以上に話の上手な人を私は知りません。動物の出てくるお伽話のほかに、身近な本当にあった話も私は好きでした。先生のお孫さん、つまり娘さんの娘さんが「すみれ」という名であることも、お話の中で知りました。先生が一番好きな花の名を付けたというその話は子供心に印象的でした。

最近、先生のお話の中に、先生のご主人のことや、すみれさんのお父さんのことが一度も出て来なかったことに気付きました。

すみれは、見ているだけで心が洗われるような色と姿をしています。いつだったか花屋のケースの中のすみれを見ていたとき、幼くてまだ訳分からずの私達を前に、孫娘の話しをしたK先生の気持ちが、初めて分かったような気がしました。

絵・携帯裕理

立川クイズ

関東地区の国鉄駅は三百以上あります。その中でも立川駅は比較的乗降客の多い駅です。ではいったい何番目でしょうか。

①10番以内②30番以内③60番以内

（11月号の答え）川の流れに沿って栄える通りにちなんで、シューベルトの「鱒」を選びました。答えは②

真如苑だより

今度おこし頂ける日は歳末もおしせまってからです。あわただしい年の瀬、ちょっと落ちつきをとり戻しに、どうぞ。

■日時　12月21日(土)
　午後2時から4時
■御本尊、真如宝物館のご案内をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■立川市民（成人）に限らせて頂きます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

工房から

●早いもので、もう"師走"が駆けよってくる音がヒタヒタと聴こえてきます。●12月12日から一週間、いよいよ『ベスト立川人展'85』が開催されます。今年一年、立川で活躍された方々を活写したギャラリーといえば、なにか華ばなしい空気が伝わってくるかもしれませんが、この中には地味で着々と"我が道"を求めておられる方もいる。もし、この写真展がなんらかの意味で立川文化に献ずるもの有りとすれば、まさにこの"地味の人"にもスポットをあてたことでありましょう。●えくてびあん特製『世紀の七曜表』（ら・び・あん・ろーず）を見た人が「これを見た人は自殺したくなるんじゃないかと心配ですよ」ともらした。全く。●冬瓜の露をはじきて　えくてびあん

（編集）青木智司　岡悦子　加賀桂子　神山清子　隅川理　田中恵子　原田礼子　矢野義範
（写真）天野武男　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第17号
昭和六十年十二月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

ファッショナーブルで いきましょう、ファッショナーブルで！

「人間はココロです」を主張する森さんの技術は素材えらびから縫製まで一貫したポリシーでつらぬかれる。熟年こそおしゃれの黄金時代だ、と。

内面の美を創造する服飾デザイナー・森淑子さん（幸町二丁目）が巷に流布しているのとはひと味ちがうファッション・ショーを開いた。モデルもお客さんたちという、成熟した人生のおしゃれ感覚とは――。

やっぱし、おんなのひとはみんなうつくしいわあ。

①左から、三谷君子さん直井君代さん塩沢トミさん②関口睦子さん③浅見悦子さん④岸中友子さん⑤畠山チヨさん⑥高野アヤさん⑦仲秀子さん⑧佐藤融さん三鴨房子さん